

# 今後の方向性と 令和6年度の取組について

R6.2.21  
総合教育会議資料



## 学力向上アクションプラン

# 門真市教育フォーラム

### ◇開催目的◇

3年間のアクションプランを総括し、これからの門真における教育の方向性を市内全教職員で確認・共有する

①アクションプラン  
3年間の総括

②学校からの  
実践報告

### ③記念講演

## 『これからの教育に求められるものとは』

合田 哲雄 氏(文化庁 次長)

この先の急激に変化する社会…

目の前の子どもたちのために、これからの教育に求められるものとは。中教審「令和の日本型教育」が示す、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて、市内全教職員で学びましょう。



④パネル  
ディスカッション

⑤次のステージへ  
向けて

全教職員参加!!

令和5年11月28日(火)  
14:00~17:00  
南部市民センターで開催

### ○学力向上アクションプラン

3年間の頑張りの結果、過去最高の成績  
しかし、全国平均の目標は達成できず

### ○門真市の学校の授業の様子

- ・30人～40人の**多様な子どもたちへの一斉授業**  
→「みんな一緒に」「みんな同じことを」「同じ方法で」は限界
- ・子どもたちが**考える時間が少ない受け身の授業**  
→子どもたち自身がしっかり考えて学び、力をつける授業へ

⇒ 「令和の日本型学校教育への転換」を提案

### 3. 3本の政策と実現に向けたロードマップ

## 【政策1】子供の特性を重視した学びの「時間」と「空間」の多様化＜目指すイメージ①＞

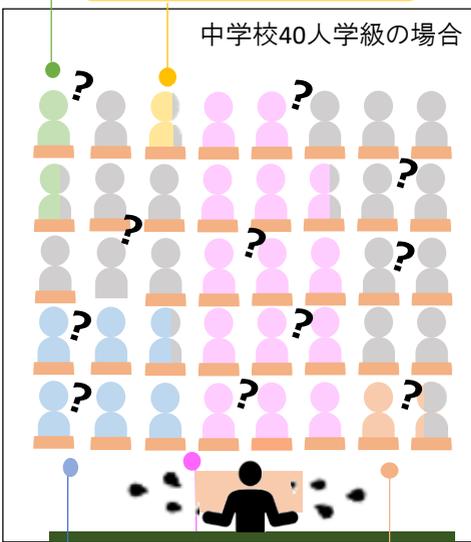
すべての子供たちの可能性を最大限引き出すことを目指し、子供の認知の特性を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「そろえる」教育から「伸ばす」教育へ転換し、子供一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を実現するとともに、一つの学校がすべての分野・機能を担う構造から、協働する体制を構築し、デジタル技術も最大限活用しながら、社会や民間の専門性やリソースを活用する組織(教育DX)への転換を目指す。これを実現するためには、皆同じことを一斉にやり、皆と同じことができることを評価してきたこれまでの教育に対する社会全体の価値観を変えていくことも必要となる。

子供たちが多様化する中で紙ベースの一斉授業は限界

発達障害の可能性のある子供

特異な才能のある子供

中学校40人学級の場合



2017年改訂により資質・能力重視の教育課程へと転換

多様な子供たちに対してICTも活用し個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実

**主体**  
**子供主体の学び**  
 子供の理解度や認知の特性に応じて自分のペースで学ぶ  
**教師による一斉授業**  
 一定のレベルを想定した質の高い授業展開

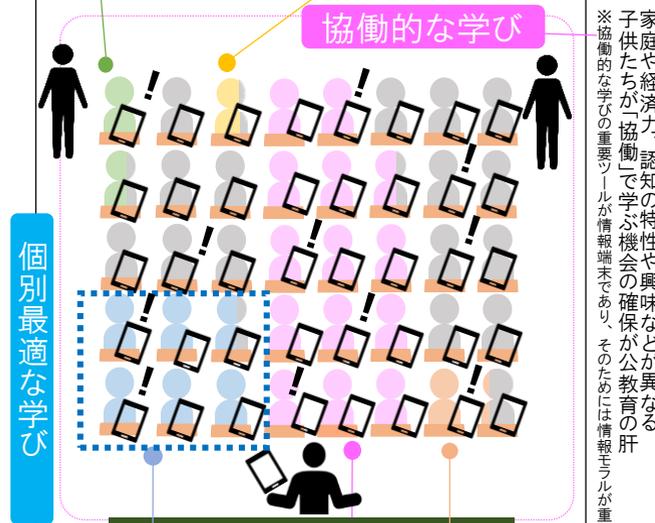
発達障害等  
 自分の特性を理解し、ICTを活用しながら、自分に合った学び方で進めることができる

特異な才能のある子供  
 特異な才能のある分野を伸ばすため、大学や研究機関で学ぶことができる

**学校種 学年**  
**学年に関係なく**  
 学年・学校種を超える学びや学年を遡った学びも  
**同一学年で**  
 同一学年で構成され該当学年の学び

**空間**  
**教室以外の選択肢**  
 教室になじめない子供が教室以外の空間でも  
**同じ教室で**  
 集団行動が基本となる教室で

**教科**  
**教科等横断・探究・STEAM**  
 教科の本質の学びとともに、教科の枠組みを超えた実社会に生きる学びを  
**教科ごと**  
 教科担任制のもと教科ごとの指導



**教師**  
**Coaching**  
 子供の主体的な学びの伴走者へ  
**Teaching**  
 指導書のとおり計画を立て教える授業

不登校・不登校傾向  
 学校の中に通常の学級から離れて学習ができる学びの場、教育支援センター、不登校特例校、夜間中学、フリースクールをはじめ、NPOや民間等の力も活かしつつ、従来の学び方とは別の形で学ぶことができる

日本語を家であまり話さない子供  
 特別なカリキュラム組み、ICTも活用しながら、日本語習得と同時に学びを進めることができる

**教職員 組織**  
**多様な人材・協働体制**  
 多様な教職員集団 理数、発達障害、ICT、キャリアなど専門性を活かした協働体制  
**同質・均質な集団**  
 教員養成学部等を卒業し、定年まで勤めることが基本 万能を求められる教師

家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子供  
 タブレット等の活用により自分のペースで着実に自分の理解に応じて学びを進めることができる

※子供の数の考え方・定義等については、スライド10の典拠と同様。

※限られたリソースの中、個別最適な学び・協働的な学びを追求している学校や教師も沢山いるが、現リソースでは一般的に限界があることを想定して図式化

## ①「子ども主体の学び」

→子どもたちが自分で学ぶ力の育成

## ②「探究的な学び」

→目の前の事象から課題を見出し、  
自ら問いを立て、他者と協働しながら  
解決する力の育成

## 【1】子ども主体の授業づくりに全校で取り組む

### ○授業研究のための時間確保

- ・ 年間の授業時数管理により時間を生み出し活用
- ・ 月2回は**授業づくりについて校内で話し合う**時間に

### ○教育委員会による伴走（**伴走チームによる支援**）

指導主事に加え、新しい授業づくりに長けた外部人材も入れた伴走チームを結成し、各学校に入り込んで伴走

### ○必要な**予算の確保**

- ・ 先進校視察
- ・ 学校活性化推進補助金（15万円/校）の活用

## 【2】探究的な学びの充実

### ★軽井沢風越学園との連携により推進

- ①指導主事を1学期間派遣し、探究的な学びの作り方、研修の作り方を実践的に学ばせ、**本市の核となる人材**へ
- ②**水桜学園（四中・水桜小）**をリーディング校とし、軽井沢風越学園講師による研修・指導を受けながら実践
- ③**全小中学校**に、総合的な学習の時間（探究的な学び）の**核となる担当者**を置き、水桜学園と一緒に研修を受けながら各校の実践に取り組む  
※研修は各校の**管理職も一緒に受講**し、担当を後押し